

開港場新潟に来た外国人居留者

山田 耕 太

1. 始めに

日本文明がヨーロッパ文明と遭遇したのは二度あった。一度目はキリシタン時代である。それは1549年にフランシスコ・ザビエルが来日したことを皮切りにしてもたらされた。しかし、幾度かのキリシタン追放令に続いて1639年のポルトガル船の入港禁止による鎖国政策により閉じられてしまった。その間わずかに90年足らずであったが、その影響は大きかった。¹⁾

二度目は1853年にマシュー・ペリーが浦賀に来航して開国を迫ったことに始まり、翌1854年にペリーは再び来航して江戸幕府と日米和親条約を結び、幕府は下田と函館を開港した。続いて、1858年には下田のタウンゼント・ハリス総領事が江戸幕府と日米修好通商条約を結び、幕府は函館・神奈川（横浜）・兵庫（神戸）・長崎・新潟の5港の開港を約束した。こうしていわゆる鎖国が解かれて、明治新政府成立後に開港5港と東京・築地と大阪・川口の2開市に作られた外国人居留地とその周辺の雑居地から、ヨーロッパ・アメリカの生活様式や思想文化が日本に入ってきて、やがてそれらは居留地の後背地に広がっていった。²⁾ それは紆余曲折を経て現在まで続いている。

外国人は居留地の時代には、開港場・居留地から10里（約40km）以内の移動や旅行は許されていたが、それ以上の旅行は外務省の許可が必要であった。それは不平等条約改正に伴って、1899年に外国人居留地が廃止されるまで続いた。それ以後、外国人は国内のどこにでも住めるようになり、無許可でどこにでも移動し旅行できるようになった。

開港5港の中で、新潟には三つの際立った特徴がある。第一に、新潟港は信濃川河口にある港なので、和船の北前船とは異なる大型洋式船が出入りするためには浚渫をする必要があった。それに加えて、新潟では1868年に北越戊辰戦争が勃発したことによって、他の港よりも1年遅れて1869年1月1日（明治元年11月19日）に開港した。

第二に、新潟でも外国人居留地を造成する計画はあったが、³⁾ 他の居留地に比べて外国人居留者の数が2桁違うほど圧倒的に少なく、年単位で数えれば毎年若干名であり多い時でも20人余りであった。⁴⁾ それに伴って新潟は開港5港の中で唯一外国人居留地が形成されなかった。言わばすべてが雑居地であった。⁵⁾ このような意味で、厳密に言えば「新潟居留地」ではなく、「開港場（かいこうじょう）新潟」と呼ぶのが正しい。しかし、他の居留地と比較検討するために、慣例ではあえて「新潟居留地」という名称を用いる。さらに横浜と神戸は人口が多い大都市の東京と大阪に近接していたので、東京では築地に大

阪では川口に「開市」（かいし）という名称で外国人居留地が造成された。

第三に、開港 5 港にはそれぞれ「運上所」（後に「税関」と改称）があった。だが、時代の変遷に伴いその跡地の建物はほとんど現存していない。しかし、新潟では史跡として新潟市立歴史博物館みなとびあの敷地内に保存されており、見学することができる。

2. 外国人居留者の種類

居留地の外国人の果たした役割や仕事を検討する際に、外国人の中でも居留地ないしは雑居地にある程度の長さの期間に住んで仕事をしたり、生業を営んだりした人を外国人居留者という名称を用いて本稿の対象とする。その際に、旅行や訪問や調査などの一時的な目的のために、短期間で滞在した外国人滞在者は外国人居留者の中には含まない。

外国人居留者の中には、様々な人々がいた。外国の政府から派遣された外交官や民間人もいれば、国や県から雇われた「お雇い外国人」もいた。お雇い外国人の中には、殖産興業のために尽くした技師もいれば、英語教師や医学教師などの教育者もいた。また、民間人の中には貿易商もいれば、宣教師もいた。宣教師の中には医師も兼ねる人もいれば、英語教師を兼ねる人もいた。

1868 年～ 1899 年の外国人居留地時代に開港場新潟に住んだ外国人居留者の総数は子供を除くと記録で知られる限りでは 100 人余りである。このように人数が少ないので、新潟では外国人居留者の全数調査が他の居留地に比べて比較的容易にでき、開港場新潟に来た外国人居留者の全体像を把握することができる。またそこから開港場新潟の特色が新たに浮かび上がって来よう。そこで以下では、外国人居留者の雇用形態と滞在目的の種類に分け、外国人居留者の固有名詞と滞在期間を明示して、それぞれの人々が果たした役割や仕事を挙げた上で、開港場新潟の特色をまとめてみたい。

3. 領事・商人他

1869 年に新潟港が開港すると、最初の 2 年間は外国船の出入りは年間 40 艘近くあり、外国人居留者が訪れるようになった。だが、ほとんどは横浜や兵庫（神戸）など他の港と往来であった。続く 1871 年から 1877 年までの 7 年間は、港が河口にあるので水深が十分になく、また港の投錨地が外海から遮断されておらず待避する場所もなく、大型船の出入りには不向きで、外国船の往来は年間 10 艘以下で停滞していった。

しかし、1878 年は例外で、年間 30 艘を超える船舶の出入りがあり、貿易額もそれまで毎年微々たるものであったが、この年のみ当時の金額で 6 千円を超え突出して、初めて貿易港としての役割を果たした。だがこれは中国で飢饉があり、新潟から大量の米を送り出したからにすぎない。

その後 1879 年から 1883 年までの 5 年間はほとんど外国船の往来がなく再び停滞し、1884 年に年間数艘の外国船の往来を最後に外国船は途絶えて貿易港としての使命を終えた。それに応じて 1887 年以後は日本船の往来が次第に増え、取引額が飛躍的に増大していった。主に横浜や神戸など他の開港場から新潟に船で運ばれた主な輸入品は、綿糸をはじめとする綿製品・毛製品・鉄などの金属製品であり、新潟からの他の開港場を経由した主な輸出品は、米・茶・生糸をはじめとする絹製品であった。

この間に、とりわけ開港の 1869 年から初期においてイギリス・ドイツ・オランダ・アメリカは、領事に相当する役職を置いた。イギリスは外交官である領事や副領事などが貿易に直接かかわることを禁じていたが、ドイツ人をはじめとしてオランダやアメリカは主として商人などの民間人に領事や副領事などの職務を委嘱していた。

(a) イギリス⁶⁾

新潟開港と同時に最初に領事を置いて領事館を開いたのはイギリスであった。⁷⁾ 新潟で最初に領事となったのは、ジョン・F. ラウダー (John Fredric Lauder) である。ラウダーは、1861 年に江戸のイギリス公使館で通訳生となり、長崎領事館時代の 1864 年には長州藩が攘夷の立場から外国船を砲撃したことに対してイギリス・アメリカ・フランス・オランダの四国連合艦隊が下関を砲撃した下関事件の講和談判で通訳を務めた。その後、兵庫(神戸)と大阪(川口)のイギリス領事館では副領事を務めた。1869 年 2 月に警備官のジョン・フィッツジェラルド (John Fitzgerald) を伴い、外国人を警護する別手組 10 人と共に陸路で新潟に到着した。寺町の勝楽寺に領事館を開設し、日本人の書記 1 人、雑役夫 2 人、門番 1 人、合わせて 4 人を雇った。しかし、ラウダーは新潟の貿易港としての将来性は、貨幣に対する信頼を高めることと港湾施設の不備を改善すべきことをパークス公使への報告書で指摘して、わずか半年後の 1869 年 8 月に神奈川(横浜)の領事館に戻っていった。

ラウダーに続いて、1869 年 8 月から 1871 年 9 月まで 2 年余りジェームズ・トゥループ (James Troop) が領事代理を務めた。トゥループは、開港初年度の様子を統計的データに用いて詳しく分析した。新潟港での貿易が発展しない理由として、ラウダーが簡潔に指摘した点でもあるが、贋金が出回り政府の発行する紙幣の信頼性が低い上に、港湾設備が整っていない点などを論じた。それに加えて、横浜港での輸出品が海路で新潟港に入るばかりでなく、日本人の商人によって陸路でも入っていること、米の取引を政府が管理していることや日本の商習慣、さらには新潟港が使用できるのは 5 月から 11 月までで半年近くは雪やシケで使用できないことなども指摘して、貿易港としての新潟港の可能性と限界をパークス公使への報告書で詳しく論じた。その後トゥループは新潟を去って函館の領事館に赴いた。

1872年5月からジェームズ・J. エンスリー (James J. Enslie) が新潟に赴き、副領事として1872年10月まで5か月間勤めた。エンスリーは1861年2月にイギリス公使館のオランダ語通訳として採用され、1866年から函館勤務を経て、新潟に来る直前には兵庫・大阪領事館では副領事代理をしていた。エンスリーはワトソン参事官宛の報告書で新潟港が浅瀬であり、また沖合には大型船が投錨する場所がないこと、夷港（現在の両津港）と新潟港の往来が極めて不便で補助港の役割を果たしていないことを指摘した。こうして新潟領事館は一時閉鎖され、イギリス領事館の財産は1873年に運上所から名称が改められた税関に預けられ、財産リストはドイツ領事のライスナーに託された。

新潟領事館は4年近くのブランクを経て、1876年7月に再開された。トゥループは1年半の本国での休暇を経て妻子と使用人を伴って再び来日して、兵庫・大阪の領事館での1年間の勤務を経て、副領事として1876年7月に再度新潟に赴任し、1年3か月後の1877年10月に新潟を去り、長崎の領事に赴任した。

その9か月後には、エンスリーが再度新潟に副領事代理として赴任して、1878年10月まで3か月間滞在した。そして、一年後の1879年9月に副領事代理として翌月まで在任したウィリアム・A. ウーリー (William A. Wooly) が新潟の副領事館を閉鎖した。

(b) ドイツ⁸⁾

イギリスは以上で述べたように領事・副領事クラスの外交官を派遣し、外交官には貿易に携わることを禁じたが、ドイツを始め、オランダもアメリカも、新潟に来た貿易商人に外交官の任務を担わせた。

最初に新潟に来たドイツ人商人のアルトゥール・R. ウェーバー (Arthur R. Weber) は、1863年3月に長崎に来航してクニフラー商会に入り、クニフラー商会の横浜支店、長崎支店、神戸支店を経て独立して、1869年1月に横浜から函館経由の船で新潟に入った。

長崎のアンドリアン商会から派遣されたテオドール・アンドリアン (Theodor Andrian) も同じ頃に新潟に来たが、薬物を使用していたこともあり、1869年9月に28歳で早世し、新潟の外国人墓地に埋葬された。

1869年9月にはカール・E. A. ライスナー (Carl E. A. Leysner) が横浜のテクストール商会から新潟に派遣された。ライスナーはドイツ領事も兼務していた。ウェーバーはライスナーとウェーバー・ライスナー商会を立ち上げた。このウェーバー・ライスナー商会が新潟で唯一商機を掴むことができた。しかし、ウェーバーとライスナーは次第に不仲になっていき、ライスナーが石川マキを妾として娶ったことも関係してか、争いごとが多くなり、1874年にはウェーバーとライスナーは共同経営を解消した。最後にはウェーバーがライスナーを訴える訴訟問題にまで発展して、ウェーバーは1876年11月に新潟を去

り帰国した。他方、ライスナーは、1882年7月まで外国人居留者の中で最も長く13年近く新潟に居留し、石川マキと娘のヨハナを新潟に残して帰国した。

この他に活躍したドイツ商人には、詳細は不明であるが1876年10月頃から1885年4月まで新潟に滞在したハインリッヒ・コッホ (Heinrich Koch)、1876年から1884年まで滞在したフィッシャー (Visscher van Gaasbeck)、1881年から1883年まで居留したハインリッヒ・ヘーニングハウス (Heinrich Höninghaus) がいた。

(c) オランダ

R. A. メース (R. A. Mees) はオランダ貿易会社に属する商人であったが、1869年1月から10月まで東京の副領事を務めた後で、1869年11月から新潟の副領事となった。その上でイタリア領事も兼務していたと思われる。しかし、新潟港が貿易港としては不向きであると判断して1870年8月に新潟を去った。

メースは新潟副領事時代の1870年6月16日から7月1日にかけて、イギリス副領事トゥループ、オランダ貿易会社の代理人でもあったドイツ人商人のウェーバーと共に新潟港の後背地である新潟県内から会津地方への物産の調査旅行をした。この旅行には新潟を訪問していた横浜居留地に居留し長崎と横浜でキューチョウ商会を営んでいたドイツ人商人 P. ギューチョウ (Paul Gütschow) と横浜居留地に長く居留していたスイス人の蚕糸検査技師 J. M. ジャクモ (J. M. Jaquemot) も一時的滞在者として加わっていた。⁹⁾

この他、オランダ人の商人には、1869年から1870年まで新潟に滞在した J. ファンデン・ブルーク (J. v. Bruck ?) らがいた。しかし、新潟開港1、2年後には商機を見出すことができずに新潟を去った。例外としてジェームズ・ファンデン・ボーフェン・ファッハ (James. v. B. Fagg) は、1869年頃に商人として新潟にやってきたが、次のお雇い外国人の節で述べるように、船を操る技術を持っていたので新潟にしばらく残ることができた。

(d) アメリカ¹⁰⁾

函館のアメリカ領事エライシャ・E. ライス (Elisha E. Rice) は、アメリカ弁理公使のファン・ファルケンブルグ (R. B. van Valkenburgh) から管轄区域に近い新潟開港の報告と新潟での領事代理にふさわしい人物を任命する指示を受けて、1869年1月に自分の息子で函館副領事のネイサン・E. ライス (Nathan E. Rice) を領事代理に任命したことをファルケンブルグに報告した。しかし、ネイサン・ライスは北越戊辰戦争に続く混乱などで新潟に赴くことなく1869年12月に領事代理を辞任した。

1869年10月に新潟にいたアメリカ人のヘンリー・J. アデア (Henry J. Adair) がアメリカ弁理公使のデ・ロング (Charles E. De Long) 宛に、新潟でアメリカ人の利益

を守るために新潟にいるアメリカ人の自分かお雇い外国人の項目で述べる宣教師のサミュエル・R. ブラウン (Samuel R. Brown) のどちらかを「貿易事務官」に任命してほしいという手紙を書いた。その頃、マークス氏 (Mr. Marks) も同様な申し立てをしていたようである。それを受けてデ・ロングは新潟に到着したばかりのサミュエル・ブラウンにアディアの要請に応じる旨の手紙を書き、ブラウンはそれに対して自分に与えられた新潟での任務を述べて、自分ではなくアディアを推薦する返事をデ・ロングに書き送った。

すると 1870 年 2 月に何の前触れもなく函館のエライシャ・ライス領事からブラウン宛に領事代理任命辞令とアメリカ国旗・印鑑・帳簿等が送られてきた。それに対して、ブラウンは、領事代理の認可状もないので、新潟では領事代理として認められない旨の手紙を書き、一年の内 6 か月間は新潟・函館間の船便がなく横浜経由になるので、函館のライス宛の手紙のコピーも同封して転送を願い、デ・ロング宛に手紙の返事を出した。

また、1870 年 4 月にブラウンは函館のライス領事宛に自分は学校の校務で忙しくて領事代理を務めることができないので、代わりに息子のロバート・M. ブラウン (Robert M. Brown) を推薦する手紙を書いて、新潟から函館に向かう船で息子に託してライスに届けさせた。

サミュエル・ブラウン一行は、後述するように 1870 年 7 月に新潟を去って横浜に赴いた。ロバート・ブラウンは、横浜のウオルシュ・ホール商会の社員であったが、新潟領事代理に任命され日本側でも受理されて、1870 年 10 月にアメリカ領事館が設置された。

しかし、1 か月 10 日後の 11 月にはロバート・ブラウンはその間に船便で到着した物品の処理を終えて横浜に帰り、アディアも 1870 年 4 月に既に新潟を去っていたので、新潟にアメリカ人はいなくなり、アメリカ領事館は閉鎖された。

(e) イタリア

領事や商人とは異なる民間人であるが、通称「ミオラ」と呼ばれたピエトロ・ミリオレ (Pietro Migliore) というイタリア軒の創業者となるイタリア人がいた。ミオラは 1874 年夏にフランスのスリエを団長とした「チャリネ曲馬団」の青年コックとして新潟にやってきた。ミオラは馬から落ちて大怪我をし、曲馬団一行から取り残された。新潟県令の楠本正隆の支援もあり最初は営所通 1 番町に牛肉屋を開き、次に東中通 1 番町に移転して西洋料理店と牛乳販売店を開店した。1880 年の新潟大火後の 1883 年に西堀通の現在地に場所を移して、1885 年には店名を「イタリア軒」と改めた。1897 年にイタリアの軍艦が新潟港に来港したことをきっかけとして望郷の念がつのり、1906 年にはイタリア軒を売却して帰国したが、母国の人々がミオラに無心ばかりするのに嫌気がさして翌年には新潟に戻ってきて内縁の妻鍋谷イチと同棲しイタリア軒を買い戻そうとした。しか

し、イタリア軒が前の内縁の妻鈴木サト名義で、10数年間同棲したサトも愛人と去った後で買い戻すことができずに、1912年に再度帰国して1920年にトリノで亡くなった。¹¹⁾

4. お雇い外国人

明治政府は約220年間の鎖国によって遅れた日本の近代化を進める手段の一つとして、ヨーロッパやアメリカの学者や技術者などを雇って日本人に知識や技術を直接伝授する「お雇い外国人」制度を採用した。¹²⁾ 中でも殖産興業に力を入れていたので、工部省関係の御雇外国人が多く、また出身国は1900年までだとイギリス、フランス、ドイツ、アメリカの順に多かった。そのピークは1874～75年でその総数は年間600人を超えた。その後急速に下降し、第二のピークは1889年で200人を超えたがその後は再び減少していった。開港場新潟では、1869年から1880年間に工部省関係9人、文部省関係4人、県庁関係9人、合計22人のお雇い外国人がやってきた。

(1) 工学関係¹³⁾

工学関係では工部省で雇われた佐渡金山の関係者が7人と多い。残りは県から雇われた船舶関係の2人である。

イギリス人のエラスムス・H. M. ガワー (Erasmus H. M. Gower) は、幕末に江戸幕府に雇われて北海道の萱沼炭鉱の開発を手掛けていた。1868年(慶応4年)1月に鉱山調査のために佐渡に一度来たが、江戸幕府が倒れて佐渡を離れた。しかし、明治政府御雇となって1869年6月に相川鉱山を調査し、1870年7月にイギリス人のジェームズ・スコットを連れて佐渡に赴任した。ガワーは採鉱に初めて火薬を使い、鉱石の運搬方法を人力で運ぶのではなく軌道を敷いて機械化した。しかし、アメリカから輸入した機械を整備した製鉱所は失敗して、1873年7月に解雇された。他方スコットは、1881年11月まで11年間、機械兼製鉱師として、鉱山の近代化に努めた。

1873年10月にガワーに代わってアメリカ人でフランスとドイツの大学で学び世界各地の鉱山を巡ってきたアレクシス・ジェニン (Alexis Jenin) が赴任し、溶鉱炉を建設して、開坑師兼製鉱師として1876年10月まで佐渡にいた。

1873年11月にはドイツ人のアドルフ・レー (Adolph Reh) が開坑師兼製鉱師として赴任し、それまで堅坑が掘られていなかったが、1875年から3年かけて大堅坑を開削し坑内を統合整理して1878年3月に佐渡を去った。

1873年3月にはジェームズ・デール (James Dale)、ジョン・シモンズ (John Simmons)、トーマス・トレラー (Thomas Treloar) の3人のイギリス人鉱夫が実地指導のために雇われた。デールは1874年11月まで、シモンズは1876年3月まで、トレラー

は 1877 年 12 月まで勤務した。

佐渡金山以外の御雇外国人では船舶関係者の 2 人が挙げられる。新潟夷港外国人居留取極第 3 条に基づいて、嵐などで新潟港に入港できない時に避難する補助港として夷港を開港することが定められていた。そこで新潟港と夷港の間を結ぶために蒸気船を建造して操船する必要があった。そのために 1871 年にイギリス人のニコル・マクニコル (Nichol McNicol) が雇われ、1872 年に佐渡の加茂湖岸で日本最初の蒸気船新潟丸を造船した。当時、汽船を操縦できる日本人はおらず、新潟県は 1869 年頃から新潟にいたオランダ人商人のジェームズ・ファンデン・ボーフェン・ファッハ (James. v. B. Fagg) に 1872 年 2 月から 1874 年 3 月まで操船させ、日本人が操船できるように指導にあたらせた。しかし、ファッハがいつまで新潟にいたかは不明である。

(2) 教育関係

教育関係では英語教師が圧倒的に多い。県庁から雇われた英語教師が 5 人、文部省から雇われた英語教師が 4 人の計 9 人であった。残りは県庁から雇われた医学教師 4 人で、合計 13 人であった。

(a) 県立新潟英学校・新潟学校の英語教師

国も県も英語教育には力を入れたが、新潟で最初に開かれたのは県立の新潟英学校であった。その教師に白羽の矢が当たったのはオランダ改革派の宣教師であったサミュエル・R. ブラウンであった。¹⁴⁾ ブラウンは幕末の 1859 年に横浜に来て、最初は日本語を習得することに熱心であり日本語習得の本まで出した。たまたま横浜の自宅が火事になった折に一時帰国して、再度来日した折に新潟で英語教師となったのであった。これはブラウンの娘が新潟のイギリス領事ラウダーに嫁いでおり、ラウダーが義理の父親を推薦したことによる。ブラウンは妻とキダーを伴って 1869 年 10 月に新潟にやってきて、12 月から古町の不動院で英語を教え始めた。しかし、二人の学生が聖書に関心を示したので翌年の 3 月から 12 人の学生のために日曜礼拝で聖書を教えるようになった。その当時はまだキリスト教は禁教時代であったので、1870 年 7 月にはキリスト教を説いたことで解雇され横浜に戻っていった。その時阿部欽次郎を含めて 6 人の生徒が横浜までついていき、ブラウンが横浜の修文館で教えた時にも生徒になった。ブラウンはその後、聖書翻訳や讚美歌集の出版に従事するようにもなった。また、横浜の宣教師自宅でのブラウン塾は、やがて明治学院に発展していく礎の一つになった。

ブラウンの去った後に、電信技師でもあったイギリス人のエドワード・H. キングが 1871 年 2 月から新潟英学校で教えた。キングの教え方はあまり丁寧ではなかったようだ

が、同年4月に自宅で夜中に暴徒に襲われ刀で切りつけられる事件で新潟を去った。¹⁵⁾

一時イギリス人のマクレイ夫人 (Mrs. MacLay?) がその後英語を教えたようであるが詳細は不明である。1873年4月にはイギリス人で横浜の新聞記者であったエドワード・J. モス (Edward J. Moss) が、石附五作が建てた洋学校の英語教師として雇われた。だが、それは直ぐに県に移管され、1873年5月には新潟学校と名称を変更した。モスは新潟学校の唯一の外国人英語教師として1876年3月まで働いた。¹⁶⁾ その後、イギリス人のヘンリー・リデル (Henry Liddell) が1877年8月から1878年8月まで、さらにイギリス人のエドワード・B. ランバート (Edward B. Lambert) が1878年8月から1879年8月まで英語教師として働いた。

新潟学校で学んだ学生の中には、サミュエル・ブラウンから古町の不動院で英語を学び、ブラウンに同行して横浜の修文館でも英語を学んだ後に、工部大学校 (東京大学工学部の前身) を病気のために3年で中退して新潟に戻ってきた阿部欽次郎や『大日本地名辞典』を編纂した吉田東吾 (旧姓 旗野東吾) らもいた。¹⁷⁾ 阿部欽次郎は官立新潟学校の教師をしつつ、「民衆のカレッジ」構想を実現するために、夜間学校から始めて自分の生徒を助手にして私立新潟英学校を開設した。阿部はやがて後述するように新潟に来た成瀬仁蔵から洗礼を受けて、英語教師として宣教師のドリマス・スカッターの助力を仰ぐようになった。

(b) 官立新潟英語学校の英語教師¹⁸⁾

1874年には文部省によって全国は7大学区に分けられ、その中心地の長崎・広島・大阪・愛知 (名古屋)・東京・新潟・宮城 (仙台) に官立外国語学校が設置された。第6大学区の新潟にも官立新潟外国語学校が設置され、寺町の勝楽寺を仮校舎として始めた。同じ年の12月には他の6校と共に官立新潟英語学校と名称を変更し、学校町に洋風の校舎が建てられた。

1874年9月にアメリカ人のマーティン・N. ワイコフ (Martin N. Wyckoff) が、最初の外国人英語教師として招聘された。¹⁹⁾ ワイコフは、ラトガース大学で物理と化学を学んだ。ラトガース大学の先輩 W. E. グリフィスの後任として福井の中学 (藩校明新館の後進) で英語とフランス語を教えた後で新潟にやってきた。福井での生徒の雨森信成も通訳として来た。ワイコフは官立新潟英語学校では1876年8月まで2年間英語と物理を教えた。その後、東京帝国大学の予備門となる開成学校で2年間英語を教えて帰国した。母校のラトガース大学で物理学の講師となったが、神学教育を受けて牧師となって再び来日し、横浜で神学教育の予備門である先志学校を立ち上げて後に明治学院の教授・理事となった。

ワイコフの後任として、イギリス人のジェームズ・サンマーズ (James Summers) が1876年9月から1877年2月まで官立新潟英語学校で半年間英語を教えた。サンマーズ

は開成学校で2年教えた後に新潟にやって来た。新潟を去った後で官立大阪英語学校と札幌農学校でも英語を教え、最後に築地でサンマーズ英語塾を開いて、多くの人々に英語を教えた。

サンマーズの後任として、アメリカ人の W. E. ターベル (W. E. Tabell) と M. P. ターベル (M. P. Tabell) 夫妻が、1876年9月から1877年2月まで官立新潟英語学校で英語を教えた。ターベル夫妻は、1877年2月に官立新潟英語学校が閉鎖された後に、同年9月まで県立新潟学校で引き続き英語を教えた。

(c) 県立新潟病院医学所(新潟医学校の前身)の医学教師²⁰⁾

1873年に開設された新潟医学教場時代から県立医学校が甲種医学校に移行する1880年までの7年間に4人の外国人お雇い医学教師が新潟で教えた。

フランス人のジャン・ポール・I. ヴィダル (Jean Paul I. Vidal) は、新潟在住のフランス人のエヴェラル神父の斡旋で1873年5月に最初の外国人医学教師として新潟教場(私立新潟病院)と呼ばれた時代の県立医学校の初代のお雇い外国人医学教師として着任した。ヴィダルはフランスでは陸軍軍医で産婦人科を修め、来日5か月後に東京から直接新潟に1年契約でやってきた。医学教場では物理と化学を基礎から教え始めた。1874年5月には新潟を去って、富岡の大蔵省租税寮富岡工場医となり、その後は海軍省横須賀造船所の診療医などになった。

オランダ人の W. H. ファン・デル・ヘーデン (W. H. Van der Heyden) は、オランダのユトレヒト大学出身で生理学の教員であった。来日して横浜一般病院で教えていたが、1874年11月に二代目の医学教師として赴任した。解剖学・生理学・病理学・外科学・内科学の系統的な講義を行なった。1877年3月に新潟を去った後に神戸病院医学教師となった。1884年には帰国中のベルツ (Erwin von Baelz) の代理として東京帝国大学で内科の講義も行なった。

オランダ人の C. H. M. フォック (Colnelius H. M. Fock) はユトレヒト大学を卒業してユトレヒトで開業医であったが公募に応募して来日してヘーデンの後任として1877年5月から1879年5月まで在任した。フォックの眼科講義録は『眼科提要』全四巻として1879年に新潟で出版された。新潟を去った後は、長崎病院医学校に赴任したが1883年に長崎で亡くなった。

フォックの後任として新潟学校の英語教師ランバートの斡旋でオランダ人の A. C. ホルテルマン (Adrian C. Holterman) が新潟医学校に1879年6月に県立金沢医学校から赴任し、1880年8月まで在任した。金沢では系統的で詳細な講義録が残されているが、新潟では記録がなく詳細は不明である。

1880年1月に新潟病院医学所が甲種新潟医学校に改組され、東京帝国大学出身医学士を3人以上雇うことが求められるようになり、それ以後は外国人医学教師を雇う必要がなくなった。

5. 宣教師

19世紀は世界宣教の時代であり、ヨーロッパやアメリカの各教派はキリスト教圏以外のアジア・アフリカ諸国に宣教師を派遣した。新潟でもプロテスタントの各教派とカトリックの宣教師が派遣された。プロテスタントではアメリカ改革派教会（RCA: Reformed Church in America）²¹⁾からお雇い外国人として数えたサミュエル・ブラウンを除いて2人、エディンバラ医療宣教団（EMMS: Edinburgh Medical Missionary Society）から3人、英国聖公会宣教会（Church Missionary Society）から2人、アメリカンボード（ABCFM: American Board of Commissioners for Foreign Missions）から28人、合わせて35人が派遣された。カトリックでは居留地時代の明治期前半はフランスのパリ外国宣教会から宣教師が19人、シャルトル聖パウロ修道女会から約10人が派遣された。明治期後半はドイツの神言会から宣教師が派遣されたが、居留地時代以後であるのでここでは触れない。プロテスタントとカトリックを合わせると約64人の宣教師が派遣された。

(1) プロテスタント

(a) アメリカ改革派教会（RCA）

アメリカ改革派教会は、最初にサミュエル・ブラウンとその妻のエリザベス・B. ブラウン（Elizabeth B. Brown）ならびにメアリー・E. キダー（Mary E. Kidder）²²⁾を新潟に派遣した。それぞれ1869年10月から1870年7月まで新潟に滞在した。サミュエル・ブラウンについては、既にお雇い外国人の県立新潟英学校の項目と領事・商人他のアメリカの項目で言及したので、ここでは繰り返さない。

ブラウンは県立新潟英学校の「教師館」を住まいとしていた。その教師館でキダーは日本語の獲得と共に、ブラウンの英学校に入れない主に女子生徒に英語を教えることを始めた。その自宅で日曜日毎に三人で礼拝をしていた。そこに阿部欽次郎ら二人の学生が聖書に興味をもつようになったことから1870年3月から学生向けに日曜礼拝を開始し、12人の学生に聖書の言葉を解き明かすようになった。ブラウン夫人も英語教育を手伝い、キダーもブラウン夫人も教師館での日曜礼拝では讃美歌の指導をしていた。このような英語教育とキリスト教教育を柱として横浜ではブラウン塾とキダー塾が始まり、それぞれ明治学院とフェリス女学院に発展していった。横浜ブラウン塾と横浜キダー塾の萌芽が新潟の教師館において既に見られるので、これらの活動を新潟ブラウン塾、新潟キダー塾と呼ぶ。²³⁾

(b) エディンバラ医療宣教団 (EMMS)²⁴⁾

エディンバラ医療宣教団から派遣されたセオバルド・A. パーム (Theobald A. Palm) は、築地居留地で日本語の初歩を学んで、横浜の医療宣教師のヘボンに相談した上で宣教師のいない最も困難な場所として新潟を選んだ。パームは1月に妻子を亡くした直後の1875年4月に新潟にやってきた。準備を整えてからパーム病院を開設して、医療を通して宣教する医療宣教を新潟で展開していった。

医療面では、新潟医学校の前身である県立新潟病院医学所で行われていた医学教育が長崎から来たオランダ人医師が養成されたユトレヒト大学やアムステルダム臨床医学校系のヨーロッパで勃興しつつあったフィルヒョーの細胞病理学やパストゥールらによる細菌学などの顕微鏡による医学分野での応用で、臨床医学との結びつきはまだ不十分であった。

それに対してパームが医学教育を受けたエディンバラ大学での医学教育ではパストゥールの業績に基づいてイギリスのリスターが発明した石炭酸使用による防腐法、リスター式石炭酸噴霧消毒器を用いて医療にあたることができた。これを手術に用いて「パームは死者をも生かす」といううわさが立つほどであった。また最新の医療技術指導を各地の医師に施し、顕微鏡や眼科手術機械の購入にも協力した。さらにツツガムシ病の共同研究を始め、くる病や脚気という風土病の調査・報告も行なった。

宣教面では新潟の病院では、最初は礼拝説教をしてから診察を始めたが、次第にパームの医療と伝道者の説教を分けていった。また中条をきっかけとして地方宣教に取り組み、沼垂、亀田、水原、葛塚（豊栄）、新発田、築地、中条、村上を定期的に訪問するようになり、長岡や佐渡にまで医療宣教に出かけて行った。パームを最初に受け入れたのは各地の医者たちであった。出張伝道ではパームが医療を施し、押川方義や吉田亀太郎らの伝道者が²⁵⁾キリスト教の宣教をするという分業体制が出来上がっていた。パームは1879年1月に函館の宣教師の娘のイザベルと再婚し娘のアグネスも生まれた。イザベルも各地に出かけていき宣教の手伝いをすることがあった。

1883年9月にイザベルの健康と休養のために一時帰国したが、終末論の理解のために宣教師として派遣されず、帰国後はイギリスの健康保険医また村医として生涯を終えた。パームは新潟での8年半の活動で、延べ4万人に医療を施し、150～160人の重症患者に外科手術を施し、眼科でも評判がよかった。また104人の信者に洗礼を施し、押川方義や吉田亀太郎らの伝道師を育成し、新潟県のプロテスタント諸教会の背骨をつくる宣教活動をした。

パームは、医療活動の手助けのために、1882年10月にナイチンゲール看護学校卒業のファニー・J. ショウ (Fanny Jervis Shaw) を新潟に招いて病院の実務にあたらせた。また、ナイチンゲール方式の看護教育を日本で最初に実施した。ショウは1884年6月に

大阪・川口の聖バルナバ病院に転任していった。²⁶⁾

(c) 英国聖公会宣教協会 (CMS)²⁷⁾

フィリップ・K. ファイソン (Philip K. Fyson) は、1875年10月にイギリス国教会である聖公会の宣教協会からファイソン夫人と共に新潟に派遣された。ファイソンとパームは派遣された教派は異なるが同じイギリス人であり、パームが最初に洗礼を受けた1876年1月に洗礼試問会にファイソンが立ち会い、演説会では共に弁士として演説するなどして共に助け合った。²⁸⁾

ファイソンは新潟の町ばかりでなく周辺の曽根や巻、さらには村松までも伝道に出かけていき、寺や神社の境内や門の外で説教した。また旅先でも説教することがあった。説教した後に、キリスト教書を販売するというスタイルの伝道方法であった。ファイソンは1878年から新潟で学校に通えない貧困家庭の子供のために学校を開いて毎日始業時と終業時には聖書の言葉を教えた。

1878年にファイソンはパーム（実際は押川方義）と共に、旧約聖書のヨシュア記の翻訳者に割り当てられた。ファイソンと押川方義の共同作業によるヨシュア記の草稿の出来が良かったので、ファイソンは旧約聖書の翻訳に専念する委員任命された。1882年6月に新潟を去って横浜に拠点を移し、その後サムエル記上下・列王記上下を始め、共訳を含めて旧約聖書12巻を翻訳した。ファイソンが新潟で洗礼を受けたのは10人余りと少なかったが、牧岡鉄弥という優れた伝道者を残した。

(d) アメリカンボード (ABCFM)²⁹⁾

アメリカンボードは、アメリカ東海岸のニューイングランド地方の組合教会系の宣教団体であり、神戸・大阪・京都・岡山を中心に宣教活動を展開していた。しかし、パームがイギリスに休暇で一時帰国する際に、パームはアメリカンボードの岡山で医療宣教をしていたベリー (J. C. Berry) にパーム病院と医療宣教を託していった。しかし、先に述べたようにパームが来日することができなくなったので、アメリカンボードがパームの医療宣教を引き継ぐことになった。

パームが新潟を去った直後の1883年10月に、オラメル・H. ギューリック (Orramel Hinckley Gulick) 妻の A. E. ギューリック (A. E. Gulick) ギューリックの妹のジュリア・A. E. ギューリック (Julia A. E. Gulick)、ならびに R. ヘンリー・デイヴィス (R. Henry Davis)・フランセーズ・デイヴィス (Frances Davis) 夫妻の5人が関西から新潟に来て、パーム病院をはじめとして県内各地のパームの宣教地の教会や集会を巡って伝道し牧会した。その間にパームが新潟で形成した新潟公会は、パーム病院の後継者の大和田清晴・虎

太郎医師父子に付くグループとアメリカンボードに付くグループに分かれていった。

1885年5月にギュリック一家と入れ違いに医師で宣教師であるドリマス・スカッダー (Doremus Scudder) と姉のキャサリン・スカッダー (Catharine Scudder、愛称「ケーティー」) がアメリカから新潟に派遣され、ドリマスは医療宣教の時代は終わったと判断してパーム病院を閉鎖した。

パームが宣教した群れの中で、アメリカンボードに付く信徒のグループは、1886年7月に成瀬仁蔵を招いて新潟第一基督教会 (後の新潟教会) の初代牧師とし、大和田をリーダーとするグループは新潟一致教会 (後の東中通教会) を形成していった。デイヴィス夫妻は新潟第一基督教会の発足を見届けて1886年10月に帰国した。

やがて、成瀬仁蔵とドリマス・スカッダーは1887年5月に新潟女学校を開校した。また、1887年10月には、加藤勝哉を館長 (現在の理事長)、阿部欽次郎を幹事 (現在の教頭) とし、教頭 (現在の校長) 不在のまま、北越学館を開校した。阿部欽次郎は、自分が始めた私立新潟英学校の建物を仮校舎とし、女子生徒も男子生徒もそれぞれ新潟女学校と北越学館の最初の生徒として献げた。³⁰⁾

1887年5月に新潟女学校が開校され、10月に北越学館が開校されると、6月にはドリマス・スカッダーの両親でインドで医療宣教師として活躍したヘンリー・M. スカッダー (Henry M. Scudder) 夫妻、オベリン大学で神学博士となったジョージ・アルブレヒト (George Albrecht) 夫妻、ルイズ・M. グレイヴス (Louise M. Graves)、エリーザ・C. ケンドール夫人 (Eliza C. Kendall) の6人が加わった。さらに、10月にはコーネリア・ジャドソン (Cornelia Judson) とアーモスト大学とシカゴ神学校を出たH.B. ニューエル (Horatio B. Newell) の2人が加わった。

キャサリン・スカッダーは新潟女学校で英語を教え、ドリマス・スカッダーは唱歌や音楽を教え、ヘンリー・スカッダー夫妻は聖書を教えた。ケンドール夫人は1888年6月にドリマス・スカッダーと再婚した。グレイヴスは北越学館で英語を教え、1889年9月には神戸に派遣された。ジャドソンは3年間新潟女学校で英語を教えた後、松山に派遣され、松山女学校 (現 松山東雲学園) の教師となり後に第二代校長となった。また1891年に貧しい子供たちのために松山夜学校 (現 松山学院高校) を開設した。

ニューエルは1888年1月から1892年9月まで私立長岡学校 (県立長岡高校の前身) の英語教師となった。長岡時代のニューエルの生徒には、後に東京帝国大学の総長になった小野塚喜平次や小塩力の父で小塩節の祖父である小塩高恒らがいた。

1888年秋にはジェーン・コザット (Jane Cozat) とゲルトルード・コザット (Gertrude Cozat) の姉妹が新潟に来た。姉妹はアメリカで教師の経験があったが、姉のジェーンは北越学館の英語教師に、妹のゲルトルードは新潟女学校の英語教師になった。ジェーンは

1889年7月にニューエルと結婚して長岡に移り、1890年6月から長岡学校で英語を教えた。ニューエルは1888年10月に創立した長岡教会でも活躍した。ポケットから蛇を出して子供の関心を集めて聖書の話をした。少年時代の山本五十六もニューエルから聖書の話聞いた一人であった。³¹⁾

1888年9月に内村鑑三は北越学館の初代教頭（現在の校長）に就任したが、宣教師が学校では無給で働いていることを問題視したことに端を発し、学生たちをそれに巻き込んだ「北越学館事件」を起こして12月には新潟を去った。³²⁾ 内村の後任として1889年4月に山形英学校から松村介石が就任した。

「北越学館事件」では内村と対立した成瀬仁蔵・アルブレヒトとの間に立ったドリマス・スカッターとその一家5人は、キャサリンの病気のために1889年9月に帰国した。キャサリンは翌年2月にカリフォルニアで亡くなった。アルブレヒトは1889年9月に新潟を去って前橋に赴いたが、その後同志社の教師となった。グレイヴスも1889年9月に神戸に派遣された。

スカッター一家が去った代わりに、1889年秋にはアメリカンボードでは珍しいイギリス系カナダ人でマクギル大学を出たヒルトン・ペッドレー（Hilton Pedley）夫妻が新潟にやって来た。しかし、ペッドレー夫人は1890年5月に亡くなり新潟の外国人墓地に埋葬された。その後ヒルトンは1892年11月にマーサ・J. クラークと再婚した。1889年10月にグレイヴスに代わってアイダ・V. スミス（Ida V. Smith）が京都看病婦学校（同志社の看護学校）から派遣され、北越学館で主として理系の科目を教え、1890年9月に新潟を去った。

ジャドソンとスミスが去った代わりに1890年10月にはクララ・L. ブラウン（Clara L. Brown）とエリザベス・トーレイ（Elizabeth Torrey）が着任した。クララ・ブラウンは理学士であり、英語の他に学術生理・物理・経済を担当した。1904年に長坂鑑次郎と結婚して後に帰化し、長坂が神戸女子神学校（後の聖和大学と合併）教頭に就任するので新潟を去った。トーレイは英語の他に唱歌や音楽を担当した。

また、新潟女学校校長の成瀬仁蔵もアメリカ留学のために、後任に長岡の財界人である渋谷善作を選んで1890年10月に校長を辞任して渡米した。成瀬は帰国後に梅花女学校の校長を経て、日本女子大（現 日本女子大学）を創設して、初代校長（現 学長）に就任した。

スカッター一家の帰国とペッドレー夫人の死去に伴う人手不足を補うために、大阪からジョン・T. ギューリック（John Thomas Guilick）夫妻が1890年11月に新潟に派遣されたが、1891年6月に新潟を去って大阪に戻った。ジョン・T. ギューリック夫妻の代わりに、W. L. カーティス（W. L. Curtis）夫妻が1891年5月に仙台の東華学校から新潟

に派遣された。カーティス夫妻は北越学館閉鎖後も新潟に残り、新潟の教会に貢献した。

1890年に大日本国憲法が施行され、教育勅語が發布されると、欧化主義から国粋主義への転換が明確になり、キリスト教学校に対する風当たりが強くなっていった。新潟女学校も北越学館も1891年以後に急速に学生が集まらなくなり経営難に陥っていった。

ニューエル夫妻は新潟女学校と北越学館の立て直しのために1892年9月に長岡から新潟に戻ってきて北越学館を北越学院と改称して再建に尽力したが閉鎖に追い込まれた。その後も新潟で活躍して、1901年1月から1902年12月まで新潟基督第一教会（現新潟教会）の六代目の牧師を務めた後1904年に新潟を去り、松山でジャドソンを支援し、松山第一基督教会（現松山教会）の牧師を務めた。

そのような中で1891年10月にはアリス・E. ハーウッド（Alice E. Harwood）とカナダ人のハーパー・A. コーツ（Harper V. Coats）が最後の宣教師として着任し英語を教えた。ニューエル夫人の妹のゲルトルート・コザットは北越学館の英語教師であったが、1891年から最後まで新潟女学校でも教え、1892年10月に神戸女子神学校の教師として派遣された。コザットはオベリン大学神学部を出ていたので校長も務め、女子神学教育に30年以上尽くした。

北越学館は1891年12月松村教頭らが辞任して閉校し、1892年1月に阿部欽次郎は北越学館を北越学院に衣替えして、ヒルトン・ベッドレーやホラティオ・ニューウェルらと北越学院と新潟女学校の再建を試みた。だが、1893年4月に力尽きて休校宣言を出したが再開には至らなかった。阿部は、新潟簿記学校長、宇和島中学、富山中学の教師を経て、1900年には経済界に転じて加島銀行の役員として、大阪、京都、東京などで勤務した。新潟第一基督教会（現新潟教会）、四条教会（現京都教会）、番町教会の信徒・役員としても活躍した。ニューエルは閉校後も再開のために800冊とも1000冊とも言われる洋書を自宅の宣教師館に引き取り、図書館として公開した。³³⁾

アメリカンボードの宣教師たちは、新潟女学校や北越学館での教育活動ばかりでなく、パームが蒔いた種から育った新潟を中心とした村上（初期）・中条・新発田・五泉・新津・長岡・柏崎・三条などの諸教会を支え、YMCAや婦人会活動などにも力を入れていた。

(2) カトリック

(a) パリ外国宣教会 (MPE)³⁴⁾

1871年4月に最初に新潟に定住したエヴラル神父（Féleix Evrard）は、1868年から函館教会の助任神父であった。キング傷害事件が起こる3週間前のことであった。エヴラル神父は横須賀出身の従者と長崎出身の従者と共にやってきて、外国人に家を貸す人がいないので従者が家を借りて半年分を前払いするという苦肉の策で米屋の借家の2階を

間借りし、半年後には別の一軒家を借りてそこで日本語の学習に専念した。

1873年秋にはU. フォーリー神父 (U. Faurie) が来日直後に新潟に来てエヴラル神父の下で日本語の学習に励んだ。1874年頃からエヴラル神父からフランス語を学ぶ日本人も出てきた。エヴラル神父が東京に出た時に青少年のために塾を開いているマラン神父に日本語の勉強の手伝いをしてくれる書生を求めたが、なかなかその求めに応じる人がいない中で最後に承諾したのが、後に総理大臣になった原敬であった。原は1874年4月に新潟に来て、日本語を教えると共にエヴラル神父からフランス語を学んだ。1875年4月から5月に原は分家の手続きの必要があり盛岡の実家に帰る際にエヴラル神父も同行し、エヴラル神父は盛岡で11人に洗礼を授けて二人は新潟に帰った。原とエヴラルは一緒に旅行する間柄であった。同年9月にエヴラルは新潟では一人も洗礼を授けることなく横浜に転任し、原も新潟を去った。

翌月の1875年10月にドルワール・ド・レゼー神父 (Drouart de Lésey) は、函館の新城信一伝道士と共に歩いて東京からやってきて新潟の主任司祭となった。新潟で貸家がなく困っている時に規則違反を承知の上で、自分が借りてそれを神父に又貸しする洗濯屋が現れた。この洗濯屋は、エヴラル神父に貸し部屋を提供した米屋と同じ人で、後にカトリック信者となり、函館のトラピスト修道院助修士として生涯を終えた渡辺喜兵衛であった。ドルワールが古町多門通りに居を構え「天主公会」という看板を掲げると隣の貸人力車屋の主人の大江雄松 (たけまつ) が、外国人が来て汚らわしいと思いその教えに文句をつけて議論を吹っ掛けた。すると神父の明快な答えと高潔な人格に触れて、神父の弟子となって、新発田八幡の出身であったので新発田をはじめ下越地方の宣教に尽力した。下越地方での宣教の展開は、エヴラルの下で日本語を習得したフォーリー神父の働きが大きかった。

1877年9月にテュルパン神父 (Tulpin) が新潟に派遣され、フォーリー神父は東京に転任となった。ドルワール神父はこの年の暮れから佐渡への布教を始め、先ず大江雄松伝道士を佐渡に派遣し、1878年5月から佐渡に移住して1881年4月まで佐渡宣教に専従した。1878年から1879年にかけて夷町 (後の両津町) の教会ではバランシェ神父 (Balanche) が助任神父として滞在した。

ドルワール神父が新潟不在の1878年5月から1879年8月までテュルパン神父が新潟教会の主任司祭となった。また、1879年8月から1881年春までムガブール神父 (Mugabure) が主任司祭となった。1880年8月の新潟大火では、既にその時点で東中通に移転していた教会は無事であった。

テュルパン神父は1881年春に東京の浅草教会に転任となって、ドルワール神父は佐渡から戻って1881年4月から再び主任司祭となった。バレット神父 (Balette)、クレマン

神父 (Clément)、ド・ノアイユ神父 (de Noailles) の三人が助任祭司を務めた。1883年には新発田・小人町に巡回教会を設置し、そこでは平間幸右衛門が伝道士として務めた。

ドルワール神父は、1882年8月に東中通の80坪の手狭な教会から現在地の大畑の1600坪の土地を50年間借りる契約を結んで、カトリック新潟教会の将来像を描いていた。佐渡にもしばしば行っていたが、大畑の地に大聖堂を造る仕事が忙しくなってきたので、1885年4月からはド・ノアイユ神父に佐渡宣教を任せ、1885年9月には大聖堂の献堂式を終えて、主任司祭として仙台教会に派遣された。

ドルワール神父と交代で、仙台教会の主任司祭だったルマレシャル神父 (Lemaréchal) が1885年9月から1888年3月まで新潟教会の主任司祭に転任となった。コシェリー神父 (Cocherie) とプティボア神父 (Petiboy) が助任神父となって支えた。

ルマレシャル神父が行ったことは、シャルトル聖パウロ修道女会を招いて教育事業と慈善事業を興すことであった。1878年から函館で展開していたシャルトル聖パウロ修道女会の事業を新潟へ招く計画は1882年頃からドルワール神父が進めていたが手間取っていた。しかし、その計画を前に推し進めて、1887年に教会付属の明道小学校 (尋常科4年、高等科2年) を開校した。校長は大江雄松伝道士であった。この小学校では修道女経営の孤児院に入っていた寄宿生も通学生の学費もすべて無料であった。

1888年4月から1893年9月までは、ルコント神父 (Lecomte) が主任司祭となり、クリストマン神父 (Christmann)、ベルジェ神父 (Berger)、リスパル助任神父 (Rispal) が助任神父となった。シャルトル聖パウロ修道女会の事業は次第に充実していった。

1893年9月から1900年12月までは、クリストマン神父 (Christmann) が主任神父を務め、デフレンヌ神父 (Deffrennes)、マトン助任神父 (Mathon)、ユット神父 (Hutt) が助任神父として支えた。

1890年に発布された大日本国帝国憲法ならびに教育勅語によって、時代の潮目が大きく変わっていった。それに従って洗礼者数、とりわけ大人の洗礼者数が次第に減少していき、1900年にはゼロにまでなった。その後、教勢があまりふるわない秋田・山形・新潟の三県はフランスのパリ外国宣教会からドイツの神言会の宣教師が担うことになった。

(b) シャルトル聖パウロ修道女会³⁵⁾

新潟のルシャレマレ神父の要請と呼応して、シャルトル聖パウロ修道女会は、1885年9月にオズーフ司教の新潟への派遣要請に従って、函館修道院長のマリ・オウグスト修道女 (Marie Auguste)、施設係のマリ・オネジム修道女 (Marie Onéjim)、子供係のカロリーヌ修道女 (Caloline) ならびに東京から施設長としてヴィタリヌ・ジョセフ修道女 (Vitaline Joseph) を新潟に派遣した。そして育児院と授産所を開設して、見捨てられていた子供

たちと娘たちの救援に手を差し伸べた。マリ・オウグスト修道女とマリ・オネジム修道女は育児院と授産所が軌道に乗ると函館に戻った。

また翌 1886 年には、東京からマリ・アスパジエ修道女 (Marie Aspasia) が派遣され、伝道士の協力の下で週 3 回 2 時から 4 時まで施療院を開設した。最初は無理解と偏見と闘っていたが、医者から見放された幼児を連れた母親の子が薬で息を吹き返して以来、人々が施療院に来るようになった。1888 年にはマリ・アスパジエ修道女は 93 人の子供と 73 人の大人に洗礼を授けた。孤児院には 4 歳から 16 歳までの女兒が 60 人余り収容され、1890 年には施設を増築した。マリ・アスパジエ修道女は 1890 年頃には函館に去り、1892 年には盛岡に派遣された。

しかし、その後の台風や洪水、1904～1905 年の日露戦争の困難を乗り越えた施設も、1908 年には再度の新潟大火で諸施設が灰塵に帰してしまい、孤児たちは東京に避難して、新潟におけるシャルトル聖パウロ修道女会の事業は復興することなく終わった。

6. 結びに

最後に開港場新潟の外国人居留者について、データに基づいて簡潔にまとめてみたい。冒頭でも触れたように、新潟では他の居留地に比べて外国人居留者が圧倒的に少なく、居留地は形成されず、すべてが雑居地であった。名前が記録等に残っている人の総数は 100 人余りである。

職種別・雇用別に見てみると、領事・貿易商他が 17 人と割合が最も少ない。続いてお雇い外国人の 21 人が二番目である。これらの人々が来たのは開港してから数年以内の最初期で、ドイツ商人 1 人が例外的に 13 年間新潟に住んだのとイタリアの料理人が 40 年近く住んだのを除くとほとんど開港 10 年以内に立ち去っている。それは新潟港が様々な点からみて外国貿易に不向きであったかったことによる。

一番多いのは宣教師という身分で来た人々で全体の実に 6 割を占めている。開港場新潟の特徴をよく表している。浄土真宗をはじめとして仏教の伝統と地盤の強い新潟にキリスト教の根を生やそうとした努力の跡が窺われる。しかもプロテスタントがやや多いが、ほぼ半々となっている。同じキリスト教と言ってもプロテスタントとカトリックのアプローチの仕方が異なるのは興味深い点である。プロテスタントは 4 つの団体の中で、エディンバラ医療宣教団を引き継いで教育事業に転じたアメリカンボードが圧倒的に多い。それに対してカトリックは、パリ外国宣教会でほぼ占められているが、最後にシャルトル聖パウロ修道女会が一時的に加わるが資料がほとんどなく、その詳細はまだ不明である。

開港場新潟の外国人居留者の特徴として、お雇い外国人による官立学校であれ、宣教師による私立学校であれ、英語教師を第一とする人々が全体の約三分の一を占めることが挙

げられる。公も私もそれほど英語教育に力を入れてきたと言えよう。それは日本が諸外国に後れを取らずに追いつき追い越せという機運が溢れていたことを感じさせる。

次に開港場新潟に来た居留外国人を職種別・雇用別でなく、国籍別に見てみると一番多いのはアメリカ人の35人である。この大半はアメリカンボードをはじめとする宣教師である。続いて多いのはフランス人の約30人である。これは全員パリ外国宣教会とシャルトル聖パウロ修道女会の宣教師である。三番目に多いのはイギリスである。イギリスは領事関係・鉱山関係・官立学校の英語教師・宣教師と各ジャンルに均等に分かれる。日本全体のお雇い外国人で最も多いのはイギリス人であるが同じようにあらゆるジャンルに及ぶ傾向がある。四番目はドイツとオランダの7人で商人が目立つ。続いてカナダの教師3人、最後にイタリアの料理人1人である。他の居留地に見られる中国人を始めとするアジア系労働者の記録はほとんど残っていない。新潟では居留地も中華街も形成されなかった。

註

- 1) 例、リベラルアーツ教育に絞った視点では、山田耕太「キリシタン時代のリベラルアーツ教育」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第16号（2018年）、63-75頁。なお、明治初期のリベラルアーツ教育は、主として開港5港と2開市から始まり、その後背地に展開していった。2021年9月16日に敬和学園大学でオンライン開催された全国居留地研究会2021新潟大会「居留地のリベラルアーツ教育」パンフレット参照。
- 2) 横浜や神戸や長崎に代表されるように、キリスト教や教会をはじめとして衣食住に関わる「文明開化」と称されたすべての洋風のライフ・スタイルの始めは居留地に由来する。
- 3) 運上所（新潟税関）の河口寄りの隣接地。
- 4) 外務省の記録によれば、例えば1888年に横浜では外国人居留者4,494人、神戸では1,110人、長崎では1,005人いたが、新潟ではわずか20人であった。函館も93人と少なかった。ちなみに、築地は773人、川口は280人であった。
- 5) 新潟に居留地がなかった理由ならびに新潟での外国人の土地売買に関しては、青柳正俊「なぜ新潟には外国人居留地がなかったのか」『郷土新潟』第57号（2017年）、36-52頁；同「居留外国人による新潟での借地をたどる」（上）『郷土新潟』第54号（2014年）、2-19頁、「同」（中）『郷土新潟』第55号（2015年）、36-52頁、「同」（下）『郷土新潟』第56号（2016年）、33-50頁、「同」（終）『郷土新潟』第58号（2018年）、36-52頁；同「雑居地新潟に関する一考察：「外国人の居留地住居問題」を巡る展開」『東北アジア研究』第20号（2016年）、1-26頁；同「井上条約改正交渉期における新潟での外国人借地問題」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第17号（2016年）、120-199頁。
- 6) 青柳正俊『開港場新潟からの報告：イギリス外交官が伝えたこと』考古堂、2011年。
- 7) 青柳正俊「在新潟イギリス領事館をたどる：その所在地と日本人書記の動向を中心として」『郷土新潟』第53号（2013年）、14-33頁。
- 8) ペーター・ヤノハ / 青柳正俊『新潟居留ドイツ商人 ウェーバーの生涯』考古堂、2014年；青柳正俊『川港の岸辺で：新潟領事ライスナーの軌跡』新潟ドイツ領事館記念碑建立記念品、2019年；同「在新潟ドイツ領事館について」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第18号（2017年）、1-24頁；

- 同「在ドイツ領事による『説明品』のゆくえ」『郷土新潟』第59号(2019年)、64-80頁。なお、普墺(プロイセン・オーストリア)戦争後の1867年にプロイセンを中心にした北ドイツ連邦が成立し、普仏戦争後の1870年に北ドイツ連邦と南ドイツを統一したドイツ連邦(ドイツ帝国)が成立したが、本稿ではドイツという名称を一貫して用いる。
- 9) 青柳正俊『明治3年欧州視察団周遊記：新潟から会津・米沢への旅』歴史春秋出版株式会社、2020年。
 - 10) 小林敏志「新潟のアメリカ代理領事」『郷土新潟』第58号(2018年)、18-35頁。
 - 11) 「イタリア軒の沿革」新潟市編『新潟市史 資料5 近代1』1990年、627-630頁。
 - 12) ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』小学館、1975年；梅溪昇他『お雇い外国人』第1～15巻、鹿島研究所出版会、1968年；吉田ゆき「明治初期新潟の御雇外国人」『英学史研究』第18号(1986年)、15-24頁。
 - 13) 「新潟に来た御雇外国人技師」新潟県立図書館報『にいがた』第17号(1982年)、13-14頁。
 - 14) サミュエル・ブラウン『ブラウン書簡集』日本基督教団出版局、1980年、245-256頁；W. E. グリフィス『われに百の命あらば：中国・アメリカ・日本の教育にささげたS.R. ブラウンの生涯』キリスト新聞社、1985年、168-178頁；内海公子「S.R. ブラウンの来港とプロテスタント宣教の幕開け」新潟県プロテスタント史研究会編『新潟県キリスト教史』上巻、新潟日報事業社出版部、1993年、45-50頁。
 - 15) 「明治4年キング傷害事件記録(抄)」新潟県『新潟県史資料編』第13巻、1980年、1098-1101頁。
 - 16) 新潟県教育委員会『新潟県教育百年史 明治編』1970年、184-211頁。
 - 17) 「新潟学校在学生徒名簿(明治9[1876]年9月～10[1877]年7月、吉田東吾作成)」『新潟県教育百年史 明治編』1045-1046頁。
 - 18) 『新潟県教育百年史 明治編』212-216頁；吉田ゆき「官立新潟英語学校」『英学史研究』第19号(1982年)、77-92頁；同「新潟開港と英語教育」『東日本英学史研究』第9号(2010年)、38-43頁。
 - 19) 「新潟英学校へ米人ワイコップを雇用することについての伺」新潟県『新潟県史資料編』第14巻、1983年、274頁。
 - 20) 『新潟県教育百年史 明治編』230-240頁；蒲原宏「幕末から明治中期までに新潟県を訪れた外国人医師とその足跡」、県立新潟図書館報新『にいがた』第17号(1982年)、1-7頁。
 - 21) オランダ系移民の人々で構成されていたので、かつては「オランダ改革派教会」(Dutch Reformed Church)と呼ばれていた。
 - 22) メアリー・キダー『キダー書簡集』教文館、1976年、26-42頁；フェリス女学院資料室編『キダー公式書簡集』フェリス女学院、2007年、15-24頁。
 - 23) 山田耕太「新潟のキリスト教学校の歩み：その芽生え、消滅、復活」『大学時報』2015年3月号、82-87頁＝山田耕太『AI時代のリベラルアーツに向けて』敬和カレッジブックレット第25号(2021年)、14-24頁；同「メアリー・キダーと新潟・新発田」フェリス女学院歴史資料館紀要『あゆみ』第73号(2021年)、19-47頁＝『AI時代のリベラルアーツに向けて』、34-73頁。
 - 24) パームの医療宣教に関しては、蒲原宏「パーム先生とその病院のことなど」『郷土新潟』第8号(1966年)、60-64頁；同「幕末から明治中期までに新潟県を訪ねた外国人医師とその足跡」新潟県立図書館報『にいがた』第17号(1982年)、1-7頁；同「T. A. パームとその協力者による新潟伝道 医師 T. A. パーム」『新潟県キリスト教史』上巻、51-59頁；大宮溥「創立者パーム宣教師」『創立百年記念 東中通教会史：創始と現在』日本基督教団東中通教会、1975年、9-81頁；同「新潟伝道の創始者セオバルド・パーム」『新潟県キリスト教史』上巻、60-66頁；本井康博『近代新潟におけるプロテスタント』思文閣出版2006年；小林敏志「医療宣教師パームによる新潟伝道：その開始と横浜公会との関係」東北史学会『歴史』第119輯(2012年)、1-27頁；山田耕太「T.A. パーム：新潟の医療宣教師」日本基督教団『教団新報』2017年6月3日号、4頁＝

- 同『AI時代のリベラルアーツに向けて』、74-76 頁。
- 25) 中村敏「押川方義と吉田亀太郎」『新潟県キリスト教史』上巻、67-73 頁；小林敏志「明治 10 年の新潟新聞紙上における仏教・キリスト教論争と押川方義の教理理解」『歴史』第 120 輯（2013 年）、114-132 頁。
 - 26) パームの新潟での 8 年半の働きを覚えて、敬和学園大学の体育館は「パーム館」と命名され、体育館の入り口にはパーム一家の写真が飾られている。
 - 27) 樋浦紘一「日本聖公会の新潟伝道」『新潟県キリスト教史』上巻、1993 年、250-252 頁；小林敏志「宣教師 P・K・ファイソン」『郷土新潟』第 60 号（2020 年）、52-66 頁。
 - 28) 探検旅行家のイザベラ・バードによる当時の新潟の様子とパームとファイソンの描写は、イザベラ・バード『日本奥地紀行』東洋文庫、平凡社、1973 年、第 15 信～第 17 信（120-148 頁）参照。
 - 29) 本井康博「アメリカンボードの越後伝道」『新潟県キリスト教史』上巻、78-92 頁；同『近代新潟におけるプロテスタント』思文閣出版、2006 年；同『アメリカンボード 200 年：同志社と越後における伝道と教育活動』思文閣出版、2010 年、351-475 頁、495-594 頁。
 - 30) 新潟女学校と北越学館に関して、松川成夫・本多繁「明治 20 年代におけるキリスト教主義学校の一側面：北越学館と新潟女学校について」日本基督教団宣教研究所『宣教研究』第 1 号（1968 年）、29-89 頁；新潟県プロテスタント史研究会編『新潟女学校と北越学館』新潟日報事業社、1990 年；本井康博『新潟におけるキリスト教教育：新潟女学校と北越学館』思文閣出版、2007 年；山田耕太「新潟女学校と北越学館のリベラルアーツ教育」『AI時代のリベラルアーツに向けて』、77-96 頁。
 - 31) 北垣宗治「自伝を通してみた H. B. ニューエル」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第 4 号（2006 年）、165-178 頁。
 - 32) 北越学館事件について、内村鑑三「北越学館設立ノ主義ト目的ニ関スル意見書」「北越学館就任のための約定書」「内村北越学館教頭の演説」『内村鑑三全集』第 1 巻、岩波書店、1981 年、171-175 頁、406 頁、419 頁；松川成夫・本多繁「明治 20 年代におけるキリスト教主義学校の一側面：北越学館と新潟女学校：Ⅲ部資料編 4. 北越学館事件転末」『宣教』第 1 号（1968 年）、74-88 頁；『本井康博『近代新潟におけるキリスト教教育』思文閣出版、2007 年、159-204 頁；片桐芳雄「北越学館事件の成瀬仁蔵と内村鑑三：「成瀬意見書」の検討を通して」日本女子大学教育学会『人間研究』第 53 号（2017 年）、3-16 頁。
 - 33) 新潟での 17 年間のニューエルの働きを覚えて、敬和学園大学の一つの校舎は「ニューエル館」と命名されている。
 - 34) 青山玄「カトリック教会による宣教の開始」『新潟県キリスト教史』上巻、29-47 頁；新潟カトリック教会編「新潟カトリック教会百年の歩み：第 1 章 パリー外国宣教会時代（明治 3-40 年）」『双塔』第 117 号（1977 年）＝新潟カトリック教会 HP 参照。
 - 35) シャルトル聖パウロ修道会 HP「日本における歩み（4）新潟」参照。

開港場新潟に来た外国人居留者データ（1868年～1899年）

I. 職種別・雇用別人数

1. 領事・貿易商・その他

イギリス	5人	その他（イタリア料理人）	1人
ドイツ	6人		
アメリカ	3人		
オランダ	3人		
	<u>計 17人</u>		

合計 18人 (17%)

2. お雇い外国人

工学関係（技師）		教育関係	
佐渡金山関係	7人	県立新潟英学校・新潟学校	英語教師 6人
造船操船関係	1人	官立新潟英語学校	英語教師 4人
		県立新潟病院医学所	医学教師 4人
	<u>計 8人</u>		<u>計 14人</u>
			<u>合計 22人 (21%)</u>

3. 宣教師

プロテスタント		
アメリカ改革派教会（RCA）	2人	（英語教師2人）
エディンバラ医療宣教団（EMMS）	3人	
英国聖公会宣教会（CMS）	2人	
アメリカンボード宣教会（ABM）	28人	（英語教師18人）
	<u>計 35人</u>	
カトリック		
パリ外国宣教会（MPE）	19人	
シャルトル聖パウロ修道女会（SPC）	約10人	
	<u>計 約 29人</u>	
		<u>合計 約 64人 (62%)</u>

総計 約 104人 (100%)

II. 国籍別人数

1. アメリカ	35人	4. ドイツ・オランダ	各7人
2. フランス	約30人	6. カナダ	3人
3. イギリス	21人	7. イタリア	1人

1. 領事・商人他 計18人

(a) イギリス 5人

ジョン・F. ラウダー (John F. Lauder) 英 1869年2月～1869年8月 領事代理・領事
ジョン・フィッツジェラルド (John Fitzgerald) 英 1869年2月～1872年9月? 領事館警備官
ジェームズ・トゥルーブ (James Troop) 英 ①1869年8月～1871年9月 領事代理
②1876年7月～1877年10月 副領事
ジェームズ・J. エンスリー (James J. Enslie) 英 ①1872年5月～1872年10月 領事代理
②1878年7月～1878年10月 副領事代理
ウィリアム・A. ウーリー (William A. Wooly) 英 1879年9月～1879年10月 副領事代理

(b) ドイツ 6人

アルトゥール・R. ウェーバー (Arthur R. Weber) 独 1869年1月～1876年11月or12月 商人
テオドール・アンドリアン (Theodor Andrian) 独 1869年1月?～1869年9月 商人
カール・E. A. ライスナー (Carl E. A. Leysner) 独 1869年9月4日～1882年7月 領事・商人
ハインリッヒ・コッホ (Heinrich Koch) 独 1876年～1885年4月 商人
フィッシャー (Visscher van Gaasbeck) 独 1876年～1884年 商人
ハインリッヒ・ヘーニングハウス (Heinrich Höninghaus) 独 1881年?～1883年? 商人

(c) アメリカ 3人

(ネイサン・E. ライス (Nathan E. Rice) 米 1869年1月～1869年12月 領事代理 籍のみ)
[サミュエル・R. ブラウン② (Samuel R. Brown) 米 1869年10月～1870年7月 英語教師・臨時領事]
ロバート・M. ブラウン (Robert M. Brown) 米 1870年4月?～1870年11月 領事代理・商人
ヘンリー・J. アデア (Henry J. Adair) 米 1869年?～1870年4月 商人
マークス氏 (Mr. Marks) 米 1869年?～1870年? 商人

(d) オランダ 3人

R. A. メース (R. A. Mees) 蘭 1869年11月～1870年8月 副領事 イタリア領事兼務
J. W. ファンデン・ブルーク (J. W. v. Bruck?) 蘭 滞在期間不詳 商人
ジェームズ・フォン・ボーフェン・ファッハ① (J. v. Boven Fagg) 蘭 1869年頃～1874年3月操船 以後不明

(e) イタリア 1人

ピエトロ・ミリオレ (Pietro Migliore) 伊 1874年～1906, 07～12年 愛称「ミオラ」牛肉店→イタリア軒創業

2. お雇い外国人 合計22人

(1) 工学関係 計8人

(a) 佐渡金山関係 7人

エラスムス・H. M. ガワー (Erasmus H. M. Gower) 英 1870年7月～1873年3月 製鋳師
 ジェームズ・スコット (James Scott) 英 1870年7月～1881年6月 器械兼製鋳師
 アレクシス・ジェニン (Alexis Jenin) 米 1873年10月～1876年10月 開抗兼製鋳師
 アドルフ・レー (Adolph Reh) 独 1873年11月～1878年3月 鋳山師兼製鋳師
 ジェームズ・デール (James Dale) 英 1873年3月～1874年11月 鋳夫
 ジョン・シモンズ (John Simmons) 英 1873年3月～1876年3月 鋳夫
 トーマス・トレラー (Thomas Treloar) 英 1873年3月～1877年12月 鋳夫

(b) 造船・操船関係 1人

ニコル・マクニコル (Nichol McNichol) 英 1871年?～1872年? 蒸気船新潟丸造船
 [ジェームズ・フォン・ボーフェン・ファッハ② (J. v. Boven Fagg) 蘭 1869年頃～1874年3月操船]

(2) 教育関係 計14人

(a) 県立新潟英学校・新潟学校 6人

サミュエル・R. ブラウン ① (Samuel R. Brown) 米 1869年10月～1870年6月 英語教師
 エドワード・H. キング (Edward H. King) 英 1870年9月～1871年5月 英語教師
 マクレー夫人 (Mrs. Maclay?) 英 英語教師 詳細不明
 エドワード・J. モス (Edward J. Moss) 英 1873年4月～1876年3月 英語教師
 ヘンリー・リデル (Henry Liddell) 英 1877年8月～1878年8月 英語教師
 エドワード・B. ランバート (Edward B. Lambert) 英 1878年8月～1879年8月 英語教師

(b) 官立新潟英語学校 計4人

マルティン・N. ワイコフ (Martin N. Wyckoff) 米 1874年9月～1876年8月 英語教師
 ジェームズ・サンマーズ (James Summers) 英 1876年9月～1877年2月 英語教師
 W. E. ターベル (夫) (W. E. Tabell) 米 1876年9月～1877年2月→1877年3月～9月 新潟学校 英語教師
 M. P. ターベル (妻) (M. P. Tabell) 米 1876年9月～1877年2月→1877年3月～7月 新潟学校 英語教師

(c) 県立新潟病院医学所 (新潟医学校の前身) 計4人

ジャン・ポール・I. ヴィダル (Jean Paul I. Vidal) 仏 1873年5月～1874年5月 医学教師
 W. H. ファン・デル・ヘーデン (W. H. Van der Heyden) 蘭 1874年11月～1877年3月 医学教師

C. H. M. フォック (Cornelius H. M. Fock) 蘭 1877年5月～1879年5月 医学教師
A. C. ホルテルマン (Adrian C. Holterman) 蘭 1879年6月～1880年8月 医学教師

3. 宣教師 合計約64人

(1) プロテスタント 計35人

(a) アメリカ・オランダ改革派教会 (Dutch Reformed Church in America) 2人

エリザベス・B. ブラウン (Elizabeth B. Brown) 米 1869年10月～1870年7月 ブラウン夫人 新潟ブラウン塾
メアリー・E. キダー (Mary E. Kidder) 米 1869年10月～1870年7月 新潟キダー塾

(b) エディンバラ医療宣教団 (Edinburgh Medical Missionary Society) 3人

セオバルド・A. パーム (Theobald A. Palm) 英 1875年4月～1883年9月 医師・宣教師
イザベラ・M. パーム (Isabela Mary Palm) 英 1819年1月～1883年9月 パーム夫人
ファニー・J. ショウ (Fanny Jervis Shaw) 英 1882年10月～1884年4月 看護師

(c) 英国聖公会宣教協会 (Church Missionary Society) 2人

フィリップ・K. ファイソン (Philip K. Fyson) 英 1875年10月～1882年6月 宣教師・聖書翻訳家
Ph. K. ファイソン夫人 (Mrs Philip K. Fyson) 英 1875年10月～1882年6月 宣教師夫人

(d) アメリカンボード宣教会 (American Board of Commissioners for Foreign Missions) 28人

オラメル・H. ギューリック (Orramel Hinckley Gulick) 米 1883年10月～1885年春 (5月) 宣教師
A. E. ギューリック (A. E. Gulick) 米 1883年10月～1885年春 (5月) ギューリック夫人
ジュリア・A. E. ギューリック (Julia A. E. Gulick) 米 1883年10月～1885年春 (5月) ギューリック夫妻娘
R. ヘンリー・デイヴィス (R. Henry Davis) 米 1883年10月～1886年10月 医師・宣教師
フランセーズ・デイヴィス (Frances Davis) 米 1883年10月～1886年10月 デイヴィス夫人
ドリマス・スカッター (Doremus Scudder) 米 1885年5月～1889年秋 医師・宣教師/教師
キャサリン・スカッター (Catharine Scudder) 米 1885年5月～1889年秋 ドリマス姉/英語教師
ヘンリー・M.スカッター (Henry M. Scudder) 米 1887年6月～1889年秋 ドリマス父/医師宣教師
ヘンリー・M.スカッター夫人 (Mrs. Henry M. Scudder) 米 1887年6月～1889年秋 ドリマス母
ジョージ・アルブレヒト (George Albrecht) 米 1887年6月～1889年9月 英語教師 宣教師
ジョージ・アルブレヒト夫人 (Mrs. George Albrecht) 米 1887年6月～1889年9月 英語教師
エリーザ・C・ケンドール (Eliza C. Kendall) 米 1887年6月～1889年秋 英語教師ドリマス夫人
ルイーザ・M. グレイヴス (Louise M. Graves) 米 1887年6月～1889年夏 英語教師
H.B.ニューエル (Horatio B. Newell) 米 1887年10月～1904年 英語教師 宣教師

コーネリア・ジャドソン (Cornelia Judson) 米 1887年10月～1889年夏 英語教師
 ジェーン・コザット (Jane Cozat) 米 1888年秋～1904年 英語教師1889年6月ニューエル夫人
 ゲルトロード・コザット (Gertrude Cozat) 米 1888年秋～1892年10月 英語教師
 ヒルトン・ペッドレー (Hilton Pedley) 加 1889年秋～? 英語教師 1892年11月M.J.クラークと再婚
 ヒルトン・ペッドレー夫人 (Mrs. Hilton Pedley) 加 1889年秋～1890年5月逝去 英語教師
 アイダ・V. スミス (Ida V. Smith) 米 1889年10月～1890年9月 理系科目担当
 クララ・L. ブラウン (Clara L. Brown) 米 1890年10月～1904年 理系科目担当 長坂鑑次郎妻帰化
 エリザベス・トーリィ (Elizabeth Torrey) 米 1890年10月～? 英語教師・宣教師
 ジョン・T. ギューリック (John Thomas Guilick) 米 1890年11月～1891年6月 英語教師 宣教師
 ジョン・T. ギューリック夫人 (Mrs. John Thomas Guilick) 米 1890年11月～1891年6月 英語教師
 W. L. カーティス (W. L. Curtis) 米 1891年5月～? 英語教師・新潟教会宣教師
 W. L. カーティス夫人 (Mrs. W. L. Curtis) 米 1891年5月～? 英語教師
 アリス・E. ハーウッド (Alice E. Harwood) 米 1891年10月～? 英語教師
 ハーパー・A. コーツ (Harper V. Coats) 加 1892年1月～? 英語教師・宣教師

(2) カトリック 計約29人

(a) パリ外国宣教会 (Missions Étrangères de Paris) 19人

F. エヴラル主任神父 (Féleix Evrard) 仏 1871年4月～1875年9月
 U. フォーリー神父 (U. Faulie) 仏 1873年9月～1877年9月
 ドルワール・ド・レゼー主任神父① (Drouart de Lésey) 仏 1875年10月～1878年5月
 テュルパン主任神父 (Tulpin) 仏 1877年9月～1881年4月
 バランシェ助任神父 (Balanche) 仏 1878年～1879年
 ムガブール主任神父 (Mugabure) 仏 1879年8月～1881年3月
 [ドルワール・ド・レゼー主任神父② (Drouart de Lésey) 仏 1881年4月～1885年9月]
 バレット助任神父 (Balette) 仏 同上
 クレマン助任神父 (Clément) 仏 同上
 ド・ノアイユ助任神父 (de Noailles) 仏 同上
 ルマレシャル主任神父 (Lemaréchal) 仏 1885年9月～1888年3月
 コシェリー助任神父 (Cocherie) 仏 同上
 プティボア助任神父 (Petiboy) 仏 同上
 ルコント主任神父 (Lecomte) 仏 1888年4月～1893年9月
 クリスマン助任神父① (Christmann) 仏 同上
 ベルジェ助任神父 (Berger) 仏 同上

リスパル助任神父 (Rispal) 仏 同上
[クリストマン主任神父② (Christmann) 仏 1893年9月～1900年12月]
デフレンヌ助任神父 (Deffrennes) 仏 同上
マトン助任神父 (Mathon) 仏 同上
ユット助任神父 (Hutt) 仏 同上

(b) シャルトル聖パウロ修道女会 (Sisters of St. Paul of Chartres) 約10人

マリ・オウグスト修道女 (Marie Auguste) 仏 1885年9月～? 孤児院・授産所開設
マリ・オネジム修道女 (Marie Onésim) 仏 1885年9月～? 孤児院・授産所開設
カロリーヌ修道女 (Caroline) 仏 1885年9月～? 子供係
ヴィタリヌ・ジョセフ修道女 (Vitaline? Joseph) 仏 1885年9月～? 孤児院・授産所施設長
マリ・アスパジー修道女 (Marie Aspasia) 仏 1886年春～1890年? 施療院開設
その他名前等の不詳の修道女約5人

尚、同一人物は①②と示し、二度目に挙げる時は [] 内に挙げて、人数の重複を避けた。
また名義のみで、実際に新潟に来港しなかった場合には () で示した。